

【底本】 国立劇場所蔵

【体裁】 半紙本 二巻二冊

【刊年】 不明。後印本か。初印は享和四年（一八〇四）。

底本には奥付がない。底本が初印本、後印本のいずれであるのかを検討するため、花卉が描かれた口絵（上ノ二才）と、役者の群像が描かれた口絵（上ノ二ウ・上ノ三才）、役人替名付（上ノ三ウ）について、中井文庫蔵本（立命館大学アート・リサーチセンター・データベースを参照、nakai.0490）と比較した。中井文庫蔵本は、巻之下が所在せず刊年不明であるが、該当丁に手の込んだ摺が施される。そのため、初印本もしくはそれに近い時期に発行されたと判断されるものである。

底本では、中井文庫蔵本で花卉の背景にあしらわれていた薄墨が省かれる。また、役者群像では、二代目嵐吉三郎の着物袖の格子模様、初代浅尾奥次郎が鉢巻きにした手拭の染模様や着物の縞模様、三代目浅尾国五郎の着物の格子模様が省略される。役人替名付についても、薄墨の装飾枠がない。読本では、後印本で薄墨が省略される例が多くあり（北川博子氏ご示教）、浮世絵版画においても、後摺作品で色摺りが部分的に省かれる例がある。底本の場合もこれらと同様だったのではないだろうか。底本は薄墨や色摺りの手間を簡略化して売り出された後印本と考えられる。

なお、初印の刊年については、北川博子氏「大坂出版史における絵入根本」（『近世文藝』一一九号、二〇二四年、日本近世文学会。以下、北川論文）末尾の「絵入根本一覽」に拠った。初印本と考えられる西尾市岩瀬文庫蔵本には奥付が備わり、

「画工 浪華江南 松好齋半兵衛」「享和四年甲子初春 書林 大阪心齋橋通唐物

町 河内屋太助版」と記される。

【版元】 河内屋太助

【絵師】 松好齋半兵衛

【初演】 天明八年（一七八八）二月十六日、大坂大西芝居 「義臣伝読切講釈」

一、歌舞伎「義臣伝読切講釈」の上演と絵入根本の配役

絵入根本『忠臣連理の鉢植』は、歌舞伎「義臣伝読切講釈」全八幕のうち、第三幕「浅草の段」と第四幕「植木屋の段」の台帳をもととしている。絵入根本には各幕の名称は記されていないが、それぞれ巻之上、巻之下として収録される。

「義臣伝読切講釈」は、赤穂浪士の仇討ちを題材としており、登場人物名からは「仮名手本忠臣蔵」の影響下に成立した作品であることが明らかである。また、「日本花赤穂塩竈」（安永六年十二月、大坂角の芝居初演）に、「浅草の段」「植木屋の段」を増補したものとされる。「義臣伝読切講釈」については、坪内逍遙・渥美清太郎『歌舞伎脚本傑作集』第九卷（一九二二年、春陽堂）、渥美清太郎『日本戯曲全集 赤穂義士劇編』第十五卷（一九二八年、春陽堂）に解題がある。

初演以降の上演記録については、国立劇場芸能調査室編『上演資料集 86 忠臣連理の鉢植・四十七刻忠箭計・松浦の太鼓』（一九七二年、国立劇場調査養成部芸能調査室）にまとめられている。同書と番付から、初演後、享和四年（一八〇四）に絵入根本『忠臣連理の鉢植』が発行されるまでの間の上方（大坂、京）での再演について、次のとおり確認した。各上演の初日、劇場、外題を記す。

①の1 天明八年（一七八八）三月四日、大坂北堀江市ノ側の芝居

「義臣伝読切講釈」（「浅草の段」「植木屋の段」のみ上演）

①の2 天明八年(一七八八)三月二十一日、大坂北堀江市ノ側の芝居
「義臣伝読切講釈」(「浅草の段」「植木屋の段」のみ上演)

※①の1と同じ興行。一部上演演目が変更される。

②天明八年(一七八八)九月十五日、京四条北側西芝居
「仮名手本忠臣蔵」

③寛政二年(一七九〇)十一月六日、大坂中の芝居
「太平記忠臣講釈」

④寛政五年(一七九三)九月十五日、京四条北側西芝居カ

外題不明

※寛政六年刊『役者松囃子』京之巻に、「けいせい楊柳桜」の切狂言にて
「植木屋」を上演したとの記述あり。

⑤寛政五年(一七九三)十一月、大坂堀江新芝居
「読切講釈四十七訓」(番付未見、上演資料集を参照)

⑥寛政七年(一七九五)八月十七日、大坂角の芝居
「太平記忠臣講釈」

⑦寛政八年(一七九六)十月十一日、京四条南側芝居
「忠臣花桜木」

⑧寛政九年(一七九七)十月十八日、大坂北新地芝居
「敵討四十七文字」

⑨寛政十年(一七九八)三月六日、大坂天満天神社地
「義臣伝読切講釈」(「浅草の段」「植木屋の段」のみ上演)

⑩寛政十一年(一七九九)十一月カ、大坂北新地芝居カ
「再興義士礎」

⑪寛政十二年(一八〇〇)四月四日カ、京因幡薬師芝居カ

「義臣伝読切講釈」（「浅草の段」「植木屋の段」のみ上演）

⑫寛政十二年（一八〇〇）八月カ、大坂竹田芝居

「太平記忠臣講釈」

⑬享和二年（一八〇二）九月十四日、大坂中の芝居

「義臣伝読切講釈」（「浅草の段」「植木屋の段」のみ上演）

初演後、一カ月と経たないうちに、「義臣伝読切講釈」の外題で「浅草の段」「植木屋の段」の二幕のみが再演されている（再演①の1・2）。その後も、「義臣伝読切講釈」の外題で上演が重ねられるが、本作品の初印が発行される享和四年までの間では、通し狂言としての上演は確認出来なかった。再演①の1・2以降に、同外題で再演された⑨、⑪、⑬についても、番付の配役から「浅草の段」と「植木屋の段」の上演であったことが分かる。さらに、再演①の1・2、⑨、⑬については、外題に「浅草の段」「植木屋の段」と添えられている。「義臣伝読切講釈」全八幕のなかで新たに作られたこの二幕は、繰り返し上演され、観客から好評を得ていた様子うかがえる。

また、この二幕については、忠臣蔵物の代表作に挿入する形で上演されることもあった。再演②では、「仮名手本忠臣蔵」の第六幕として「浅草の段」と「植木屋の段」が上演されている。また、再演③、⑥、⑫のように、「太平記忠臣講釈」のなかで上演された例も確認できる。

あわせて、各上演の配役を見ていきたい。末尾に掲げた【表】主な配役比較で示したとおり、初演以来、弥七・弥五郎は二代目嵐三五郎が演じ続け、二代目が隠居してからは三代目へと引き継がれていった。お鷹・お蘭の方は初演以来、初代沢村国太郎が勤めている。再演⑧と⑫では、弥七・弥五郎を中山久吉、泉川楯蔵が、お鷹・お蘭の方を姉川熊次郎、中村吉蔵が勤めているが、これは中芝居での上演で

あると考えられる。当時の観客にとって、弥七・弥五郎と言えば嵐三五郎、お鷹・お蘭の方と言えば沢村国太郎であった。

沢村国太郎がお蘭の方に扮する姿は、役者絵でも確認される(春湖「らんのかた沢村国太郎」細判錦絵、早稲田大学演劇博物館所蔵、016-0397)。1)の役者絵については、現在、「仮名写安土問答」(寛政六年十一月、大坂中の芝居上演)に取材したと考証されているが、役者と役名の結びつきの強さや、背景に菊花が描かれていることを考慮すると、「義臣伝読切講釈」のお蘭の方であると考えられる(北川博子氏「示教」)。

このような上演実態を反映して、絵入根本でも、主役には嵐三五郎と沢村国太郎の名コンビがあてられている。嵐三五郎については、口絵と挿絵の似顔から、三代目である。そのほかの主な配役については表で示したとおり、刊年に最も近い再演⑬の役割番付とほぼ一致する。喜三郎など、一部では配役が異なるものの、主要な役については完全に一致する。加えて、端役であるため表に含めなかったが、絵入根本の役人替名付に記された「こしもと浪花 座本山下徳次郎」も、再演⑬と同一である。実際の上演を意識して、あえて座本名を示したのだと解釈できる。

本作品では、直近の上演(享和二年九月)から絵入根本の初印版行(享和四年正月頃)までの期間が短い。絵入根本の配役は、仮想の配役となっていることが通例であるが、本作品においては実際の上演を意識して制作された可能性が高い。

二、絵入根本の本文

絵入根本本文と歌舞伎「義臣伝読切講釈」の台帳を比較していききたい。台帳は複数の所在が確認されるが、比較には、初演と役人替名付がほぼ一致していて、初演台帳の写しと考えられる早稲田大学演劇博物館蔵本(口16-00374)。以下、演博台帳)

を用いた。同本は、表紙に「義臣伝読切講釈 浅草の段 植木屋の段 壺冊物」と墨書されることから、端本ではなく、「浅草の段」「植木屋の段」の二幕分で完結するものである。「義臣伝読切講釈」のなかで上演頻度が高く、人気のある二幕を抽出した台帳として、貸本で出回ったのだと考えられる。

また、北川論文では、享和二年（一八〇二）から文化五年（一八〇八）にかけて発行された絵入根本の書名は、歌舞伎の外題と同一ではなく、外題替えの処置がなされていることが指摘される。本作品が発行されたのもこの期間に該当し、『忠臣連理の鉢植』は、「浅草の段」「植木屋の段」での弥七とお鷹の恋愛劇を象徴するような書名となっている。

絵入根本本文と演博台帳を照合したところ、両者の脚本の筋や、演出は同一であった。したがって、本作品の本文は、初演台帳をもとに作られたと考えられる。

ここで、本作品特有のこととして注目しておきたいのは、役名・役者名の扱いである。絵入根本では、台帳でセリフの頭書部分に記されていた役者名や、ト書の中の役者名を、役名に改めて記すことが通例となっていく。しかし、絵入根本史の初期にあたる本作品では、セリフ部分を役名に改めている一方で、ト書については、役者名で記しているのである。巻之下のト書で、杵右衛門と源四郎の役名がわずかに見えるほかは、役名で記されるのは刀屋、米屋、家主、腰元といった端役に限られる。絵入根本と初演台帳で配役が一致するのは、嵐三五郎（代数が記されていないため）と沢村国太郎の二名のみであるので、台帳の役者名が残ってしまったのではなく、絵入根本本文のために役者名を書き換えていることが分かる。本作品においては、ト書を役者名で記すという編集方針がとられているのである。

このように、役名・役者名の扱い方が後の通例とは異なるのは、絵入根本の形式が定まっていなかったためと考えられる。

三、絵入根本の挿絵と松好斎

本作品の挿絵を担当したのは大坂の浮世絵師、松好斎半兵衛（生没年未詳、寛政年間前期〜文化五年頃に活躍）である。

松好斎は絵入根本の挿絵を担当する以前にも、塩屋長兵衛から出された役者絵本『絵本二葉葵』（寛政十年刊）と『俳優児手柏』（享和二年刊）を手掛けている。両絵本では、絵入根本の挿絵と同じく、芝居の一場面を想起させる背景に、演技をする役者の全身像が描かれているが、こうした形式の役者絵本は、師の流光斎如圭（生没年未詳）が手掛けた寛政二年刊『画本行潦』から始まる。『画本行潦』は、それまでの役者絵本が役者の姿を描くことに主眼を置いていたのに対して、舞台面を丹念に描いているのが特徴であった（北川博子「役者絵本と一枚絵の流行」『上方歌舞伎と浮世絵』二〇一一年、清文堂）。

この『絵本二葉葵』と『俳優児手柏』の実績から、松好斎は絵入根本の絵師に抜擢された。そして、絵入根本の第一作となる享和二年刊『絵本戯場葉』から文化五年刊『絵本壁生草』にかけて、松好斎は毎年、絵入根本の挿絵を担当し、七作品を手掛けることとなる。

役者絵本『絵本二葉葵』『俳優児手柏』が、多数の歌舞伎演目の各場面を採録した画集であるのに対して、絵入根本では読み物の挿絵として、一つの演目から複数の場面が選ばれ、描かれている。そのなかには、役者絵本には描かれないような血しぶきが飛ぶ殺しの場面、おかしみのある場面なども含まれ、一連の挿絵によって、芝居の流れを大まかにたどることが出来る。こうしたことから、役者絵本と比べると、絵入根本の挿絵は紙上で芝居を再現するという一面が際立っているのではないだろうか。

また、松好斎が活躍した時代、錦絵は細判がおもな判型であった。縦に細長い画

面の制約もあり、松好斎の細判錦絵の役者全身像は、静止的な立ち姿が多い。一方で、見開きにすると横長画面となる絵入根本の挿絵では、役者が躍動感のある身体描写で描かれ、そこに臨場感のある背景描写が加わる。松好斎にとって絵入根本の挿絵は、錦絵とは異なる画力を発揮する場となっていた。

以上のように、本作品は、配役や本文中の役名・役者名の扱い方において、絵入根本の形式が確立される以前の試みを見ることのできる貴重な作品である。また、挿絵を担当した松好斎の画業を理解するうえでも重要な作品であると言える。

(インターネット上での版本や番付、浮世絵などの最終閲覧日は、二〇二四年三月二十日)

【表】 主な配役比較

※代数が分かる場合は、役者名の後に算用数字で代数を記した。

再演⑬ 享和二年 九月十四日	再演⑫ 寛政十年 八月九日	再演⑪ 寛政十一年 四月四日カ	再演⑩ 寛政十一年 十一月九日	再演⑨ 寛政十年 三月六日	再演⑧ 寛政九年 十月十八日	再演⑦ 寛政八年 十月十一日	再演⑥ 寛政七年 八月十七日	再演⑤ 寛政五年 十一月	再演④ 寛政五年 九月十五日	再演③ 寛政二年 十一月六日	再演② 天明八年 九月十五日	再演①の2 天明八年 三月二十一日	再演①の1 天明八年 三月四日	初演 天明八年 二月十六日	演博台帳	絵入根本	弥七
嵐三五郎3	泉川権蔵	嵐三五郎3	嵐三五郎3	嵐釜之1 二三五郎2	中山久吉	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎2	嵐三五郎3	お鷹
1 沢村国太郎	中村吉蔵	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	姉川熊次郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	記載なし	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	1 沢村国太郎	李右衛門
嵐吉三郎2	芳沢亀蔵カ	門 大谷友右衛門	藤川八蔵	3 姉川新四郎	中山栄蔵	3 姉川新四郎	嵐吉三郎2	嵐吉三郎2	嵐吉三郎2	中山他蔵	3 姉川新四郎	3 姉川新四郎	3 姉川新四郎	3 姉川新四郎	3 姉川新四郎	嵐吉三郎2	お市
1 芳沢いろは	カ 泉川崎之助	中村吉次郎	榊山雛松	山下亀松	豊松熊吉	藤川友吉	記載なし	記載なし	記載なし	浅尾仙之助	中山咲蔵	嵐徳松	嵐徳松	市山太次郎	1 芳沢いろは	お新	
3 中村のしほ	記載なし	嵐山吾	沢村京三郎	芳沢小紫	荒木与三郎	嵐富菊	カ 瀬川菊三郎	記載なし	1 芳沢いろは	カ 坂東重太郎	沢村伊三郎	記載なし	記載なし	吐秀之助	3 中村のしほ	お新	
門7 片岡仁左衛門	記載なし	嵐藤十郎	記載なし	門 山下李右衛門	記載なし	2 音羽治郎三	2 音羽治郎三	記載なし	記載なし	今村七三郎	三保木八百右衛門	2 音羽治郎三	2 音羽治郎三	2 音羽治郎三	門7 片岡仁左衛門	なまきさ 和尚	
3 浅尾国五郎	松島清蔵	嵐半五郎	門 大谷友右衛門	嵐音八3	谷村文吉	嵐三津右衛門	嵐二八	記載なし	嵐二八	嵐二八	沢村国十郎	沢村国十郎	沢村国十郎	カ 中村吉蔵3	3 浅尾国五郎	太四郎	
浅尾友蔵1	記載なし	嵐音五郎	松島富五郎	嵐谷蔵	記載なし	中村伊蔵	嵐こま蔵	記載なし	記載なし	中村門十郎	嵐新九郎	嵐新九郎	嵐新九郎	沢村国十郎	浅尾友蔵1	九郎八	
尾上新七2	姉川峰吉	片岡文三郎	記載なし	沢村国三郎	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	叶雛助	嵐吉三郎2	嵐吉三郎2	嵐吉三郎2	嵐吉三郎2	1 浅尾奥次郎	喜三郎	
江戸坂正蔵	荻野亀蔵カ	富沢松八	富沢松八	江戸坂正蔵	荒木団八	2 音羽治郎三	中山文五郎	記載なし	記載なし	郎 市の川彦三	嵐新九郎	尾上勘四郎	尾上勘四郎	尾上勘四郎	江戸坂正蔵	種森兵内	